

## 東南アジア史学会会報 № 24

昭和 50 年 4 月

### 研究大会報告

第 14 回秋季研究大会は昭和 49 年 11 月 16 (土), 17 (日) の両日, 上智大学 7 号館特別会議室で開催され, 会員 67 名, 海外からの参加者 5 名をふくむ内外の研究者が参加した。本大会の特色のひとつは英語と中国語の研究発表に対する日本語と英語による質疑応答という新しい試みを実行した点である。日本文の研究発表要旨については前号に掲載したが, 英文と中文による論文については委員会で要約・翻訳して本号に掲載した。第 2 日午後の研究発表について, 鹿児島大学ビルマ学術調査報告(藪 司郎)および第 6 回国際アジア歴史学者大会 (IAHA) 報告(山本達郎, 生田滋)があり, 最新の学界情報を伝えた。

### 総会報告

上記研究大会第 2 日午後に上記会場で開催した。庶務・会計委員より会員現在数, 会費納入状況, 決算報告(前号に記す)があり, 会計監査報告(竹田龍児監事)の後, 収支決算報告を承認した。続いて, 会長より会費を年間一般会員 2,000 円, 学生会員 1,500 円に値上げする案について趣旨説明があり, これを承認した。会報・会誌編集委員より会報 № 23 を 11 月 16 日に, 会誌『東南アジア歴史と文化』第 4 号を 11 月 13 日にそれぞれ発行したこと, および出版費上昇に対応して紙面, 紙質, 活字等の体裁を改め経費節約を計った旨の説明があった。総会の質疑応答では会費と会誌代金との関係, 研究例会の開催などの議題を中心とした討論があった。

なお, 第 1 日の研究発表終了後, 上智会館で会員懇親会をおこない, 国内国外の研究者が参加して意見を交換した。

### 東南アジア史研究の国際交流

白鳥芳郎

ここ数年来, 東南アジア史学会の会員数も目に見えて増加し, すでに 200 名に及ぶまでに

至った。このことは正に東南アジアの文化や歴史に关心をいだく同学の士が相互に連絡を密にし協力を図る機関として、この学会の存在意義を愈々昂めているものと思う。会員諸士の中には、研究調査のために東南アジア諸地域に出張される人も多く、また欧米をはじめ諸外国の学者並び研究機関との交流を促進している人も少なくない。これはまたこの東南アジア史学会が国際的レベルにおいて活動していることを示している。昨年本学会の秋季研究大会において、香港の中文大学と香港大学の諸教授を迎へ、極めて成功に大会を催すことが出来たことは既に御承知のことゝ思うが、このような国際的雰囲気の下に外国学者との研究交換が実現したことは、偏へに本学会会員である陳和教授の熱心な努力とアジア財團の、ジェイムス L. ステュアート氏などの御協力の賜であつて、両氏の御援助に対して裏心より謝意を表する次第である。同大会では鄭德坤、陳荆和、饒宗頤、趙令揚、屈志仁諸教授が、それぞれ興味深い研究を発表され、東南アジア史の各研究分野について注目すべき問題提起も多くあって甚だ有意義なものであった。その折、上記諸教授からお預りしてある論文原稿は、本来ならばすべて学会誌に掲載したいものであるが、学会の財制的な都合もあって、取りあえず、その論文の要旨のみ要約し、本会報に掲載させていたゞくことにした。香港から参加された諸教授の好意に、深く感謝すると共に併せて本学会の事情をも御諒承いたゞきたいと願う次第である。なお、来る5月下旬には、タイ国学者で美術史を専攻しておられるDiskul 氏が来日され、本学会は東方学会と共に同氏の講演を聴く会合を催すことになっている。

### 第14回秋季研究大会発表要旨 (英文・中文の部)

#### 明実録中之爪哇

趙 令 揚

明実録。明史などによると、爪哇(ジャワ)から明朝への朝貢は、洪武元年(1368)から嘉靖5年(1526)までに70回にも達し、とくに15世紀が盛んで永樂朝(1403—1424)では毎年のようにジャワの朝貢使節が到来した。

これら朝貢関係の記事を主として、明代の中国・ジャワ関係の内容を考えてみると、両国の関係は政治的でもあったが、とくに文化的・通商的なものであった。ジャワが明朝に対して朝貢をつけたのは、前者が後者に従属したからではなく、ジャワがその周辺諸地を制圧し臣属の貢献をさせる目的にとって、明朝の権力と威信を利用するのが有効だと考えたためである。

至った。このことは正に東南アジアの文化や歴史に关心をいだく同学の士が相互に連絡を密にし協力を図る機関として、この学会の存在意義を愈々昂めているものと思う。会員諸士の中には、研究調査のために東南アジア諸地域に出張される人も多く、また欧米をはじめ諸外国の学者並び研究機関との交流を促進している人も少なくない。これはまたこの東南アジア史学会が国際的レベルにおいて活動していることを示している。昨年本学会の秋季研究大会において、香港の中文大学と香港大学の諸教授を迎へ、極めて成功に大会を催すことが出来たことは既に御承知のことゝ思うが、このような国際的雰囲気の下に外国学者との研究交換が実現したことは、偏へに本学会会員である陳和教授の熱心な努力とアジア財團の、ジェイムス L. ステュアート氏などの御協力の賜であつて、両氏の御援助に対して裏心より謝意を表する次第である。同大会では鄭德坤、陳荆和、饒宗頤、趙令揚、屈志仁諸教授が、それぞれ興味深い研究を発表され、東南アジア史の各研究分野について注目すべき問題提起も多くあって甚だ有意義なものであった。その折、上記諸教授からお預りしてある論文原稿は、本来ならばすべて学会誌に掲載したいものであるが、学会の財制的な都合もあって、取りあえず、その論文の要旨のみ要約し、本会報に掲載させていたゞくことにした。香港から参加された諸教授の好意に、深く感謝すると共に併せて本学会の事情をも御諒承いたゞきたいと願う次第である。なお、来る5月下旬には、タイ国学者で美術史を専攻しておられるDiskul 氏が来日され、本学会は東方学会と共に同氏の講演を聴く会合を催すことになっている。

### 第14回秋季研究大会発表要旨 (英文・中文の部)

#### 明実録中之爪哇

趙 令 揚

明実録。明史などによると、爪哇(ジャワ)から明朝への朝貢は、洪武元年(1368)から嘉靖5年(1526)までに70回にも達し、とくに15世紀が盛んで永樂朝(1403—1424)では毎年のようにジャワの朝貢使節が到来した。

これら朝貢関係の記事を主として、明代の中国・ジャワ関係の内容を考えてみると、両国の関係は政治的でもあったが、とくに文化的・通商的なものであった。ジャワが明朝に対して朝貢をつけたのは、前者が後者に従属したからではなく、ジャワがその周辺諸地を制圧し臣属の貢献をさせる目的にとって、明朝の権力と威信を利用するのが有効だと考えたためである。

一方、明朝側では朝貢国に対する寛大な政策をとると同時に、ジャワを東南アジアの重要な勢力として重視した。ジャワは明廷の寛大な政策を利用した。すなわち、明の皇帝に上位者と自認させることによって、価値多い頌賜品を入手し、またジャワの使節は大陸沿岸でシナ商人と違法の取引をして帰った。こうした利得を期待して朝貢使節が続々と至つたのである。明朝廷が東南アジア諸国に対して威信を保持したのは、鄭和の遠征の結果だけではなく、貧慾な各国君主および彼の使節に価値ある贈物を与えた皇帝の虚栄心にも困つたのである。

(文責・和田久徳)

## 蒲甘国史事零拾 — Gordon H. Luce's Old Burma—Early Pagan 書後 —

鏡宗頤

Luce氏の著書は甚だ勝れたものであるが、漢籍としては蛮書と嶺外代答。諸蕃志を引用しているのに過ぎないので、その他の漢籍資料によってこれを補つてみよう。

李根源氏の永昌府文徵、方國瑜氏の宋史蒲甘伝補（文史雜誌Ⅱ. 11, 12）には張鼎臣、東原録の記事が引かれているが、これは誤で、この記事は本来は張知甫の可書にみえている。宋代の史料として重要であるから全文を掲げる。そこには紹興丙辰（6年A.D. 1136）の大徳國。蒲甘國の使者入貢の記載があり、玉海（卷153）、宋会要（卷199蕃夷）にも関連記事がある。蒲甘は大理に対して附庸の関係と認められる。大理の使者に関して記されている彥貴という文字は官号である。宋代には大理國行程、蒲甘國行程という本があったが、後者は紹興年間には既に失われていた。崇寧五年（A.D. 1106）の蒲甘の入貢はKyanzittaが大理の圧迫を受けて宋と結ぶ目的で派遣したと解されている。緬（蒲甘）は崇寧二年（A.D. 1103）政和五年（A.D. 1115）にも大理に入貢しており、大理ではその頃高氏が政権を握っていた。大理の宋への入貢の様子（A.D. 1115, 16）は宋史大理伝に記されているが、湖南経由の陸路をとるもので、海路によつたものではない。大理では仏教が広く行われ、金書、金銀書の経文を宋に奉っているが、大威德經と伝えられているのは大威儀經の訛であろう。ニューヨークのメトロポリタン博物館所蔵の大理文治9年（A.D. 1118）の金書の維摩維は重要な史料である。ビルマ人は大理をGandhalaとよんでおり、またTarup=Turksとは“唐土”を指し、Utibwa（梵語Udaya, 日の出）は吐蕃が南詔に与えた王号“日東王”に当る。Pyumandhi, Pyusawhtiは驥苴底に当り、mañ, saw (chao) は共に王を指す。南詔野史にみえる祖先神話には仏教信仰があると共にこれを東亜人類の祖先となしている。

一方、明朝側では朝貢国に対する寛大な政策をとると同時に、ジャワを東南アジアの重要な勢力として重視した。ジャワは明廷の寛大な政策を利用した。すなわち、明の皇帝に上位者と自認させることによって、価値多い頒賜品を入手し、またジャワの使節は大陸沿岸でシナ商人と違法の取引をして帰った。こうした利得を期待して朝貢使節が続々と至つたのである。明朝廷が東南アジア諸国に対して威信を保持したのは、鄭和の遠征の結果だけではなく、貧慾な各国君主および彼の使節に価値ある贈物を与えた皇帝の虚栄心にも困つたのである。

(文責・和田久徳)

## 蒲甘国史事零拾 — Gordon H. Luce's Old Burma—Early Pagan 書後 —

鏡宗頤

Luce氏の著書は甚だ勝れたものであるが、漢籍としては蛮書と嶺外代答。諸蕃志を引用しているのに過ぎないので、その他の漢籍資料によってこれを補つてみよう。

李根源氏の永昌府文徵、方國瑜氏の宋史蒲甘伝補（文史雜誌Ⅱ. 11, 12）には張鼎臣、東原録の記事が引かれているが、これは誤で、この記事は本来は張知甫の可書にみえている。宋代の史料として重要であるから全文を掲げる。そこには紹興丙辰（6年A.D. 1136）の大徳國。蒲甘國の使者入貢の記載があり、玉海（卷153）、宋会要（卷199蕃夷）にも関連記事がある。蒲甘は大理に対して附庸の関係と認められる。大理の使者に関して記されている彥貴という文字は官号である。宋代には大理國行程、蒲甘國行程という本があったが、後者は紹興年間には既に失われていた。崇寧五年（A.D. 1106）の蒲甘の入貢はKyanzittaが大理の圧迫を受けて宋と結ぶ目的で派遣したと解されている。緬（蒲甘）は崇寧二年（A.D. 1103）政和五年（A.D. 1115）にも大理に入貢しており、大理ではその頃高氏が政権を握っていた。大理の宋への入貢の様子（A.D. 1115, 16）は宋史大理伝に記されているが、湖南経由の陸路をとるもので、海路によつたものではない。大理では仏教が広く行われ、金書、金銀書の経文を宋に奉っているが、大威德經と伝えられているのは大威儀經の訛であろう。ニューヨークのメトロポリタン博物館所蔵の大理文治9年（A.D. 1118）の金書の維摩維は重要な史料である。ビルマ人は大理をGandhalaとよんでおり、またTarup=Turksとは“唐土”を指し、Utibwa（梵語Udaya, 日の出）は吐蕃が南詔に与えた王号“日東王”に当る。Pyumandhi, Pyusawhtiは驥苴底に当り、mañ, saw (chao) は共に王を指す。南詔野史にみえる祖先神話には仏教信仰があると共にこれを東亜人類の祖先となしている。

元と蒲甘との関係についても趙子元の賽平章德政碑、李源道の崇聖碑などの史料を参考すべきである。台湾中央図書館所蔵の緬甸諸夷考略は乾隆年間の精写本であるが、注目すべき記載がある。

(文責・山本達郎)

## 香港発現之暹羅陶瓷及其有關問題

屈志仁

本年(1974年)五月、香港万宜水塘の建築工事場で古代木船一艘が発見された折、その船艤内と残骸の周囲に大量の陶瓷片が発見された。これらには出處、年代不明の素面厚身灰陶、19世紀晚期以降の瓦器・瓷器なども含まれているが、確実に船艤内所出のものとして、青色・褐色の単色釉瓷・青花および青白瓷・素身あるいは拍文の土器などがある。詳しく分類すれば、すなわち、元末明初の廈州窯型碎片、明代早期の廣東民窯か宋胡錄ものかも知れぬ青瓷碎片、元明間の影青様の影青類型碎片、明代中葉の青花碎片、暹羅南部の古代土器に類例がみられる灰黑色素面土器蓋、タイ国南部ないしマライ半島の所産と考えられる印文陶片、吉蔑型陶器に通ずる浅印文陶、劃文灰陶、吉蔑陶や宋胡錄陶にみるような褐釉硬陶、褐釉軟陶などの10種に分けられる。この陶瓷類からまず木船の沈没年代は明代中葉と推測することができ、さらに本発表では以下の3点について検討してみたい。

1. 東南アジア印文陶の編年
1. 明代における中国と暹羅との交渉
1. 単色釉瓷片の系統について

(文責・量博満)

## 古代サラワクと台湾の考古学

鄭德坤

これまで学界の外にあったとも言えるサラワクについて、1967年「サラワクの考古学」を出版し、主としてニア洞窟の発掘資料と大陸部アジアとの広汎な比較から古代サラワクの文化を5つの型(旧石器、中石器、新石器、青銅器、鉄器の各時代)に分類し、その文化発展を検証した。サラワクの古代文化の発展は、内的に独自な発展を持ったというよりは、むしろ大陸からの文化移入、特に南シナ海沿岸の大陵部から、新石器時代初期以後、中国文化の南進の一環として、泥状的に押し寄せてくる移住者によってもたらされたと結論した。又今日、ボルネオ島の住民は種々多様な種族から成っているが、この因って来たるところは、文化移入の複雑

元と蒲甘との関係についても趙子元の賽平章德政碑、李源道の崇聖碑などの史料を参考すべきである。台湾中央図書館所蔵の緬甸諸夷考略は乾隆年間の精写本であるが、注目すべき記載がある。

(文責・山本達郎)

## 香港発現之暹羅陶瓷及其有關問題

屈志仁

本年(1974年)五月、香港万宜水塘の建築工事場で古代木船一艘が発見された折、その船艤内と残骸の周囲に大量の陶瓷片が発見された。これらには出處、年代不明の素面厚身灰陶、19世紀晚期以降の瓦器・瓷器なども含まれているが、確実に船艤内所出のものとして、青色・褐色の単色釉瓷・青花および青白瓷・素身あるいは拍文の土器などがある。詳しく分類すれば、すなわち、元末明初の廈州窯型碎片、明代早期の廣東民窯か宋胡錄ものかも知れぬ青瓷碎片、元明間の影青様の影青類型碎片、明代中葉の青花碎片、暹羅南部の古代土器に類例がみられる灰黑色素面土器蓋、タイ国南部ないしマライ半島の所産と考えられる印文陶片、吉蔑型陶器に通ずる浅印文陶、劃文灰陶、吉蔑陶や宋胡錄陶にみるような褐釉硬陶、褐釉軟陶などの10種に分けられる。この陶瓷類からまず木船の沈没年代は明代中葉と推測することができ、さらに本発表では以下の3点について検討してみたい。

1. 東南アジア印文陶の編年
1. 明代における中国と暹羅との交渉
1. 単色釉瓷片の系統について

(文責・量博満)

## 古代サラワクと台湾の考古学

鄭德坤

これまで学界の外にあったとも言えるサラワクについて、1967年「サラワクの考古学」を出版し、主としてニア洞窟の発掘資料と大陸部アジアとの広汎な比較から古代サラワクの文化を5つの型(旧石器、中石器、新石器、青銅器、鉄器の各時代)に分類し、その文化発展を検証した。サラワクの古代文化の発展は、内的に独自な発展を持ったというよりは、むしろ大陸からの文化移入、特に南シナ海沿岸の大陵部から、新石器時代初期以後、中国文化の南進の一環として、泥状的に押し寄せてくる移住者によってもたらされたと結論した。又今日、ボルネオ島の住民は種々多様な種族から成っているが、この因って来たるところは、文化移入の複雑

元と蒲甘との関係についても趙子元の賽平章德政碑、李源道の崇聖碑などの史料を参考すべきである。台湾中央図書館所蔵の緬甸諸夷考略は乾隆年間の精写本であるが、注目すべき記載がある。

(文責・山本達郎)

## 香港発現之暹羅陶瓷及其有關問題

屈志仁

本年(1974年)五月、香港万宜水塘の建築工事場で古代木船一艘が発見された折、その船艤内と残骸の周囲に大量の陶瓷片が発見された。これらには出處、年代不明の素面厚身灰陶、19世紀晚期以降の瓦器・瓷器なども含まれているが、確実に船艤内所出のものとして、青色・褐色の単色釉瓷・青花および青白瓷・素身あるいは拍文の土器などがある。詳しく分類すれば、すなわち、元末明初の廈州窯型碎片、明代早期の廣東民窯か宋胡錄ものかも知れぬ青瓷碎片、元明間の影青様の影青類型碎片、明代中葉の青花碎片、暹羅南部の古代土器に類例がみられる灰黑色素面土器蓋、タイ国南部ないしマライ半島の所産と考えられる印文陶片、吉蔑型陶器に通ずる浅印文陶、劃文灰陶、吉蔑陶や宋胡錄陶にみるような褐釉硬陶、褐釉軟陶などの10種に分けられる。この陶瓷類からまず木船の沈没年代は明代中葉と推測することができ、さらに本発表では以下の3点について検討してみたい。

1. 東南アジア印文陶の編年
1. 明代における中国と暹羅との交渉
1. 単色釉瓷片の系統について

(文責・量博満)

## 古代サラワクと台湾の考古学

鄭德坤

これまで学界の外にあったとも言えるサラワクについて、1967年「サラワクの考古学」を出版し、主としてニア洞窟の発掘資料と大陸部アジアとの広汎な比較から古代サラワクの文化を5つの型(旧石器、中石器、新石器、青銅器、鉄器の各時代)に分類し、その文化発展を検証した。サラワクの古代文化の発展は、内的に独自な発展を持ったというよりは、むしろ大陸からの文化移入、特に南シナ海沿岸の大陵部から、新石器時代初期以後、中国文化の南進の一環として、泥状的に押し寄せてくる移住者によってもたらされたと結論した。又今日、ボルネオ島の住民は種々多様な種族から成っているが、この因って来たるところは、文化移入の複雑

な迷路にあり、この迷路を解きほぐすことが今後の課題として残っている。

台湾では、1967年以後、長濱、大坌坑、圓山、鳳鼻頭の調査が実施され、旧石器文化、繩蓆文化、龍山期相当文化の各文化層が明かにされたが、台湾の先史文化の意義として次の4点が指摘出来よう。1) 連続する3つの文化は、大陸の文化発展に対応するもので、同様の現象はボルネオでもみられる。2) 現在の台湾のマラヨ・ポリネシア語族は龍山、圓山両文化の系統をひくものと考えられる。3) 民族と文化の移動は台湾で止まった訳ではなく、フィリピンやボルネオと同様に中国東南部から太平洋地域への文化移動の踏み石としての役割を果している。4) 台湾及び古代ボルネオの文化の発展は、厳密には特殊性があるが、それにもかかわらず大陸文化と深いかかわりあいをもっている。このことは東南アジアの諸島及び太平洋の南西諸島にも言える。

(文責・青柳洋治)

### 春季研究大会のおしらせ

日 時： 昭和50年5月31日（土） 10：00—17：00

場 所： 上智大学（東京・四ツ谷） 7号館14階 特別会議室

10：00 白石昌也 「ファン・ポイチャウと日本」

11：00 宮本 勝 「ハヌヌー・マンギャン族の宗教と社会」（スライド使用）

13：30 飯島明子 「タイにおける1688年のレボルシオンとフランス」

14：30 坪井善明 「阮朝嗣徳帝統治下のベトナム（1848-83）—政治的側面を中心として」

15：30 吉田禎吾 「バリ島の宗教」（スライド使用）

### 委員会報告

昭和49年11月17日正午より上智大学で地区委員をふくむ拡大委員会を開催した。主要議題は総会への報告事項、審議案件について、とくに会費値上げ、会費と会誌代金との取扱いについて、および研究例会の開催について等である。

50年度第1回委員会 昭和50年3月14日（土）4時より 於 学士会館

出席者 白鳥会長、山本、和田、竹田、永積、市川、生田、量、青柳の8委員

— 6 —

報告事項 1) 会報 No. 2, 3 及び振替用紙の発送, 2) 会費納入状況, 3) 会誌掲載希望原稿

審議事項 1) 春季研究大会の準備, 2) 会報 No. 2, 4 の内容（香港より来日の学者の発表文の掲載方法）, 3) 月例会（研究例会）について

尙、山本委員より、Dr. Diskul の講演会が、5月30日（金）及び6月2日（月）の両日、華山会館で開かれるとの報告があった。

第2回委員会 昭和50年4月19日（土）5時より 於 上智大学

出席者 白鳥会長、山本、永積、市川、青柳の4委員

報告事項 1) 田淵会員の計報, 2) 春季研究大会の準備状況, 3) 会長選挙の件について

審議事項 1) 秋季研究大会の準備, 2) 月例会の日程について（別項参照）

## 月例会報告。予告

第1回 昭和50年4月19日（土）14：00～ 於 上智大学7号館第2会議室

佐藤茂教氏の「南ベトナム古文書館調査」についての報告後、山本達郎、伊東照司、永積昭ら3氏から書籍紹介があった。

第2回は7月5日（土）15：00より、第3回は10月4日（土）15：00より、いずれも上智大学7号館第2会議室で開催を予定しております。

なお月例会通知をご希望の会員は庶務係までご連絡ください。

## 秋季研究大会予告

日 時： 昭和50年11月1日（土）、2日（日）

場 所： 上智大学 7号館 特別会議室

プログラムは未定ですが、シンポジウムおよび個人発表についてご意見、ご希望がございましたらご連絡ください。

## 第7回国際アジア歴史学者大会（IAHA）のおしらせ

上記大会の第1回通知が昭和49年10月18日付で到着しましたのでおしらせします。連

絡先は次のとおりです。

Dr. Pensri Duke

Secretary-General, the 7th IAHA Conference

Faculty of Arts, Chulalongkorn University

Bangkok 5, THAILAND

At our recent very successful and stimulating Sixth IAHA Conference held in Yogyakarta, Indonesia, August 26—30, 1974, it has been decided to hold the Seventh IAHA Conference in Bangkok, Thailand in 1977, for which Chulalongkorn University will act as a host.

The following names have been chosen for the Executive Committee for the Seventh IAHA Conference:

President: Rector of Chulalongkorn University

Vice-Presidents: Dr. Sartono Kartodirdjo (Indonesia)

Prof. T. Yamamoto (Japan)

Dr. Vishal Singh (India)

Secretary-General: Dr. Pensri Duke (Thailand)

This is our first circular on the Seventh IAHA Conference. If there is any further information, I will send them to you.

As has been agreed to at the Conference, I shall appreciate your cooperation in informing your colleagues in your country of the contents of this circular. Please feel free to make any suggestions to me which assist in improving the next IAHA Conference.

Yours sincerely

Dr. Pensri Duke

Secretary-General of the 7th IAHA Conference

## 庶務報告

1. 新入会員 昭和49年11月～50年4月 18名（別項）
2. 住所変更会員 9名（別項）

なお住所変更のあった場合は必ずおしらせください。併せて昨年お願いしております会員カード作成用の資料をまだ返送されていない会員は至急お送りくださいますようお願いいたします。

昭和50年5月発行

発行者 東南アジア史学会

住所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7  
上智大学文学部白鳥研究室

電話 (03) 265-9211 内線 257  
振替 東京 59721